

講道館柔道，タイを往く —その2—

村田直樹

武道の稽古に暑中稽古がある。

柔道でも一年のうちで最も暑い時期を選び、主に精神修養を目的に実施されている。我々柔道人は夏が来るといつも思う。

「ああ、また夏が来た。暑中稽古の季節だなァ。」

日本の夏も高温多湿。この時期の稽古では柔道衣が二、三着要る。発汗量が異常なくらい増えるのだ。しかし、老若男女が一堂に会し、修練に励む姿は仲々よい。皆、元気盛ん。額に輝ける汗は修業の勲章か。そして頑張っている誰もが言う。

「もう少しの辛棒だ。」

もう少しの辛棒。もう少しの辛棒——。さてこの言葉、私はタイに居て考えさせられた。「もう少しの辛棒だ」というその言葉の裏には何がある？それは、暑い中での苦勞もやがて終わりが来るのだ、という救いへの依存ではないか。暑中稽古の次には、やがて涼風心地よい秋が来る、と——。

もう少しの辛棒。この言葉は、救いが約束されている、だから頑張れ、という依存、甘えの言葉なのだ。確実に来る涼しい季節を思っただけだ。

では、その秋が無かったら……？

私はそれを体験した。日本に倍しての高温多湿。日中は40℃を越え、おまけに秋など絶対来ない酷暑常夏の国タイ。街を歩くだけで汗にまみれ、ネクタイの結び目まで

が湿り、現地のタイ人が日に何度もシャワーを浴びる街、バンコク。

そこで柔道をしたら一体——！

昼間は体育大学で柔道を教え、夜はタイ柔道協会の道場へ行った。折から蒸し暑い晩だった。国立競技場観覧席裏下に柔道場が設置されている。出入り口一つ、風通しゼロの場所である。着替えて道場に立てば、すでに胸には二筋、三筋と糸引く汗、額に手を当てれば小さくビッシリ玉の汗、汗。

「なるほど暑い！」

そう思った。

そしてタイの黒帯相手に稽古が始まるや、猛烈な汗。相手は変わるがこちらは一人。次から次へと掛かってくる。

相手の技能は大したことない。が、この暑さが大敵だ。折から心臓は鳴りっ放しだし、又何よりも喉が渇いて仕方ない。やがて頭がボーッとして来た。鏡に映る自分の顔はまるで湯ダコ。

私は遂に申し出た。

「ちょっと休ませて欲しい。」

情けなく、悔しかった。けれども仕様がなない。体の方が赤信号を点滅し始めてしまったのだ。

私はたった一つしかない出口から外へ出て柔道衣を脱いだ。目の前の木立ちが闇夜に並び、シルエットの様だった。その木立ちを見上げながら上衣を脱いで裸になる。

風に当たり、過熱の体を冷やそうと。

しかし、シルエットの葉は揺れず、相変わらずの高温多湿だけが私の裸を包むのだ。流れる汗はそのままに、ただただ流れ落ちるのみ。

「ああ……………」

何と暑い国。この暑さからどうやって逃れよう。

「アハハハハ……………」

後ろで笑い声がした。振り向けば、出口付近で何人かのタイ人がこちらを向いて笑っている。

「畜生！ 負けてなるものか。」

そう思っても、私の顔は熱いだけであった。

辛棒 —

一体この国で、どうやって辛棒すればいいんだ。何処へ行ったって涼しい所なんか有りゃしない。

足許に脱いだ柔道衣を拾えばズッシリと重かった。汗を吸った柔道衣。こいつも大変だなァ。しかし、そんな感傷にいつまでも浸ってはいられない。私は再び拾い上げた柔道衣を着、黙って黒帯を締めるのだった……………」

— つづく —